

特別活動教育研究会

部 長	森 川 智 之
	松 浦 恵 美
研究主任	加 藤 俊 輔
部 員 数	28名

1 研究主題

豊かな人間性を育む特別活動の創意工夫

2 はじめに

研究主題である豊かな人間性を育むために、各校の現状を踏まえて、ねらいに沿う具体的な取り組みや、教育現場ニーズの多様化に伴う時間短縮、新型コロナウイルス感染防止対策を講じる中で、最大限の効果を発揮する取り組みについて、協議をもとに追究している。

3 研究経過

- (1) 各校の特別活動の取り組みについて、毎月の研究会でディスカッションテーマを設け、小グループで情報交換し、全体で内容を共有し、協議した。
- (2) ディスカッションテーマについては、実施計画立案前に設定し、今年度の各校の実践に活かせるような計画で活動を進めた。
- (3) 来年度以降を見据え、コロナ禍でも行える体制、各校の実践の工夫を共有した。

4 研究の概要

- (1) 5月 <テーマ>運動会と体育大会、文化祭について

コロナ禍における運動会、文化祭のあり方について検討した。昨年度は感染対策を重視して密を伴った活動を減らす取り組みが多かったが、今年度は工夫しながら可能な限り集団としての高まりを育てる実践が各校で行われていた。中学校では、学年を分けたり練習期間を短くしたりして、合唱交流会を行う予定のある学校もあった。学校規模によって実施可能、不可能な点があるが、大いに参考になった。

- (2) 9月 <テーマ>児童会、生徒会活動について

小学校であれば代表委員会、中学校であれば生徒議会の運営方法などについて話し合った。子どもたちで議会が進むよう、役割分担を徹底したり、司会進行の工夫をしたりしている学校が多かった。中学校では生徒会選挙についても話題になり、投票を紙ではなくタブレットで行っている学校が過半数を占めた。立ち会い演説会もコロナ禍を意識した動画から以前の形に戻した学校も見られた。

(3) 10月 <テーマ>送る会、感謝の会について

昨年度に引き続き、各学年の出し物をビデオ撮影し、それを視聴するという形をとっている学校が多かった。小学校では、1～5年生が6年生といっしょに遊ぶという「思い出をつくる会」というものを実施したところもあった。中学校では、入試日程が前倒しになったこともあり、大々的に送る会を実施する学校は少ないようだった。その中でも、動画で感謝を伝えたり、3年生が卒業式練習で体育館に集まっている間に教室を飾り付けたりと、実施ができない中でも工夫を凝らした計画をしている学校があった。

(4) 11月 <テーマ>運動会・体育大会、文化祭のふり返りについて

小学校では、熱中症対策で開催時期を9月から10月に変更したこともあり、ゆとりをもって運動会の練習ができた。全校実施は難しい段階にある学校も、来年度以降は全校での実施も視野に入れて計画をしているとのことだった。中学校では、体育大会と文化祭の間の期間が短く、教員も生徒も忙しかったという課題があがった。熱中症対策、進路日程を考慮したことから、二つの行事の練習が重なる期間が生じたためであった。コロナ前の完成度を意識するとやることが多くなってしまうため、ねらいを明確にし、短期集中で子どもたちの気持ちを高める工夫が必要であると感じた。

5 今後の課題

昨年度は「感染対策をとった上で、どのような実践ができるか」を中心に話し合いが展開されたが、今年度はコロナ対策を意識しつつ、どこまでコロナ前特別活動に戻していくのかが話題の中心であった。話し合いを通して、コロナウイルスの感染拡大は特別活動にとってマイナスな面だけではないと考えるようになった。特別活動の本来のねらいや目的を十分考えるようになり、思い切った行事の精選も行われた。学校の実践を共有することで、新たな気づきや発見も生まれた。今後も他校の実践を共有する場を設定し、特別活動の本質に迫ることができるようにしたい。また、感染症対策を意識した特別活動も大切ではあるが、そろそろそこから脱却し、本来あるべき人間関係形成や自己実現の方法を模索していけるようにしたい。

感染症対策とは別に、入試日程の変更、教員の働き方改革など、様々な視点から特別活動の今後が議論されている。行事や生徒会活動の精選は今後必ず必要となってくるが、「活動を通して子どもたちに身につけさせたい力は何か」という視点を教員は忘れてはいけないと感じた。学校ごとに受け継がれてきた伝統行事も、ねらいや意味をもう一度考えることで見えてくるものがあると思う。未来を生きる子どもたちに必要な力を身につけさせられるよう、これからも特別活動のあり方を考えていきたい。